

## アラブ・日本人租界のドクター事情

岡本 文夫（元アラビア石油、元国務大臣政策担当秘書）

日本を離れること 1 万キロ。日本人オイルマンがサウディアラビア王国の原油生産現場で勤務する上で必須となる医療環境を軸としてドキュメントしてみよう。

筆者が現地駐在した通算 8 年間。約 130 人の日本人が常駐し操業に従事する中、病気で亡くなった同僚が 3 名。交通事故死が 2 名。開発権益更新の応援に来て頂いた通産省 K 部長も、交通事故で殉職された。如何に厳しい現場であったかを物語っています。

更に、湾岸戦争に先立つ湾岸危機と称する半年間は、サウディ政府の厳命により退避が許されず、「死にたくない！しかし逃げられない！」という過度の拘束性ストレスから、6 名が発癌。イラク軍の猛砲撃で殺された者は、幸いにしていなかったものの、日本での治療虚しく逝去した日本人従業員が 3 名いたことも悲しい事実です。

### 第三章 カフジの名医列伝

後藤ドクターは、久しぶりに来てくれた信頼すべきキャリアの医者だった。都立小岩病院の院長を定年退職した後、まだまだ世間のお役に立ちたいと、僻地医療に尽くすためにアラブの日本人租界に貢献の場を求めた。

内地であれば、僻地診療に従事する志の高い医師もたまにはいるし、組織として僻地診療をキャリアパスに組み込む大学医学部もある。しかし、祖国を離れること 1 万キロの炎暑の地となると、来てくれる医者などまずいないのが現実だ。130 名の従業員と 40 所帯前後の帯同家族から構成される日本人租界は、長期現地勤務者の精神安定剤として日本人医師の常駐を切望していた。それまでに、やっと来てくれた医師たちは、なかなかの個性派ぞろいであった。

長らく船医を務めていた尾崎医師は、着任早々から名医との評判を欲しいままにして、一躍カフジ村の人気者となった。

『尾崎先生に往診して頂ければ、たちどころに治る！』  
滅多に母港に帰れない長期航路の貨物船に乗っていただけあって、年に一度の

長期休暇でしか日本に帰れないという過酷な環境にも強く、現地勤務への適応度に不足はなかったし、深夜の往診にも快く応じてくれていた。

ところが、ある日、名医のメッキが剥げる時がきてしまった。原油出荷部の課長を務める鈴木義光が、日頃の激務とストレスから就寝中に胃痙攣を発症した。往診に飛んできた尾崎は、一本の注射をうって即座にこれを治してみせた。感謝された尾崎は、治療のお礼にと心行くまでご馳走になって、上機嫌で帰っていった。

しかし、鈴木は残してあった注射液のアンフルを見て驚愕した。アンフルには『MORPHINE』（モルヒネ）と記されていた。たちどころに治してみせる診療技術の秘密はここにあったのだ。病気が本当に治ったのではなく、痛みを散らす麻酔剤を使っただけのことだったのだ。

長期乗船中に重病人が出た場合、本当の治療は最寄りの寄港地で患者を降ろして然るべき病院で行う。船医はそれまで、痛みを散らす応急治療を行うだけなのだ。

急速に信頼を失った尾崎医師は、一年間の契約期間を終えると『カフジ丸』から下船して帰国していった。

筆者が一回目のカフジ勤務についた当初は、契約を終えた医者が帰国したのに後任がみつからず、完全な無医村状態だった。これを補うために深町という医者が三ヶ月だけ長期出張して来て空白を埋めた。

ある社宅での週末の会食が行われた際に、筆者は深町医師と同席することになったのだが、常に上から目線で語る嫌味な男だった。日本では有力政治家や一流経済人の主治医であることが自慢であり、誰でも知っている著名人の名前が次々に列挙された。

『医者たる者が、患者のプライバシーを誇ったりするものなのか？』

自分を高く印象付けるためには、守秘義務などお構いなしの男だということだ。

「クリニックが千代田区内にあるんですがね、施設拡張工事に三か月かかるものですからねえ、休暇を兼ねてカフジがどんどころか見に来たんですよ」

問われてもないのに、嘘か本当か解らない離日理由をもっともらしく説明した。

さらに深町は、聞き捨てならない台詞を吐いた。

「ボクは内科医なんですがね。本当は精神科医に進みたかったんですよ。そのボクが目からすると、カフジの従業員の皆さんの中には、精神科医の興味をそそる対象の方がたくさんおられますねえ」

平和な環境や家族との団欒から引き離されて、過酷なアラブでの長期任務に就く者は、赴任当初は大なり小なり現地不適應症状を示すものだ。中には、在任の全期間を通して、ノイローゼを克服できない不幸な従業員もいる。

誰しも、現地での仕事や生活に順応しようと苦勞しなければならぬ。着任早々の不適應症を他人に悟らせないようにしながら、まさに順應努力の途上にあつた筆者には、不愉快千萬な話だつた。

『なんだと、この馬鹿野郎！ たつた三か月來ただけで、勝手な台詞を吐きやがつて！ 先の見えない長期現地勤務に就く者の気持ちか、お前に解つてたまるか！』ところが、本当は不適應症状に悩んでいるのは深町自身だつた。大きく構えた発言は、まさに自分自身の精神状態を語っていた。語るに落ちるとはこのことだ。

診療室では、医者と看護師が同室している。女性の就業が許されない国で、看護師だけが例外的存在なのだ。女性が家族以外の異性に顔を見せてはいけない厳然たるソーシャルタブーが支配するサウディでは、異性が同じ空間にいることのできる唯一の妬ましい職場がカフジ病院の診療室なのだ。

全ての単身赴任者は丸一日女性の顔を見ることはできない。週末に家族帯同者の社宅へ食事に招待された時にのみ、同僚の奥方の顔を見ることができるといふ。うるさ型で人気のない男にはお呼びが掛からないから、その種のタイプは年に一度の長期休暇でアラブを離れる時に、やっと異性の顔を拝むことができる。カフジの男たちの気のすきみたるや思いやるべしである。立派な大学を出た男が、刺身包丁を振り回して喧嘩したなどという情けない実例もあるくらいだ。

その時、病院にはふたりの日本人看護師が勤務していた。アラビア語が堪能な平良は小児科に配属されてパレスチナ人医師の手伝いをしていた。

深町の診療室には、肉感的でなかなかの美人と評判の看護師の当麻順子が勤務していた。男性にとつても女性にとつても、日本国内に比べようもない異常な環境の中で、深町がどうやって口説いたかまでは解らないが、日本の妻子をさておいて結婚を約束したようだ。

カフジの日本人租界の落胆と迷惑を省みず、当間は契約を破棄してしまい、三か月で帰国する深町と一緒に消えてしまった。看護師の存在を心から頼りにしていた日本人現地在住者にとつては、許せない裏切り行為ではないか。

帰路の婚前旅行を兼ねたヨーロッパで、徐々に深町は冷静に戻つたようだ。

成田に着いた深町は、当麻とは別の車で妻子が待つ家路についた。

カフジでその後の顛末の噂話を聞いた筆者は嘲笑した。

『上から目線で、でかいことを抜かしやがつて！ 精神科医の興味の対象とすべきだつたのは、お前自身だつたじゃないか』

カフジコミュニティのメンバーとして円滑に定着したのは、愛すべき産婦人科医の伊藤ドクターだつた。

子供が幼くて教育の心配のない若手従業員は家族帯同で赴任するのだが、世代的には産婦人科医の駐在は必須の願ひだつた。たとえ産婦人科医がいたとして

も全体的には安心できる環境とは言い難いから、亭主は不便と寂しさを我慢して、出産を控えた妻を日本へ返すケースも多い。

それにもかかわらず、伊藤ドクターが駐在した2年間にカフジで産声をあげた日本人の赤ん坊は6人を数えており、いかに深い信頼を受けていたかの証拠と言えよう。

筆者の良き兄貴分の五十嵐聡の二女的美春も、取り上げて貰ったひとりだった。無事に出産したものの、周囲のベッドがアラブ人産婦ばかりの状況は耐え難く、五十嵐は一時間後には妻を社宅に連れ帰った。赤ん坊を運んだのはクッション代わりにバスタオルを入れたダンボール箱であった。馬小屋で生まれて藁に包まれたマリア様のような有様だったが、これがカフジの現実だった。

僻地でお世話になるほど、深く恩義を感じることはない。義理堅い五十嵐は、毎週末必ず伊藤を自宅に招いて家庭料理を振る舞った。釣りも潜りも達者であり、プロ級の料理人でもある五十嵐邸の週末パーティは豪華さを誇っていた。弟分である筆者も家族を呼び寄せるのに要した七か月半、居候のようにお世話になったものだ。後日『アラビア湾の漁労長』と一目おかれるようになるほど漁労が達者な筆者だから、毎回貴重なアラビア湾の海の幸を提供して五十嵐を喜ばせた。

常連メンバー同士として、伊藤ドクターは筆者には格別に好意を示してくれた。現地でお目にかかれるはずのない日本料理が並ぶ美味な夕食を終えると、麻雀に興じるのがお定まりのコースであったのだが、卓を囲むとドクターの表情が一変した。勝負事にのめり込むタイプであるようだ。筆者は、ヘボ雀士の分際を自任しており、安いレートでゲームを楽しんでいるだけだった。負けて当然、特に儲けてやろうなどとは考えたこともないだけに、勝負の展開に一喜一憂するドクターとは対照的であった。

豪華な料理を堪能し、麻雀も楽しんだドクターが、感謝に堪えないという風情で話しかけてきた。

「岡本さんは優しい。俺には分かっているんだ。本当にあんたは紳士です。俺は心から感謝していますよ」

自分の手許だけ見ながらしか勝負できない筆者は、その夜不用意に『中』を切り、ドクターに役満の『大三元』を振り込んでしまっていた。

「いやあ。その程度のベホ雀士なんです。まさかドクターがあんな大きな手で張っているとは全く読めませんでしたよ。ハハハ」

「違うよ、俺の言ってることは」

「はあ？何の話ですか？」

「岡本さんは、俺の過去を知っているくせに、傷つけないように何も知らないふりをしてきているんだ。あんたは武士の情けが解る男だ。エライ！」

筆者はドクターの過去など何も知らなかったし、興味もなかったのだが、一方的に感謝してもらっていることを尊重して相槌を打ちながら聞き役に徹した。

ストレスが昂じて話をしたくなっている相手には、思いっきりしゃべらせてやるのが功德なのだ。

伊藤は、都内でも有数の産婦人科病院の院長であつたらしい。カフジでも信頼を集めるのが当然の優秀な医師なのだ。ところが、生来のギャンブル好きが昂じて裏社会の賭博のカモにされてしまい、挙句の果てには病院を手放さざるを得なくなった。名声と財産を一挙に失って日本に留まっていられなくなったドクターは、気持ちの整理を求めて僻地医療に逃避したらしい。

その後も、五十嵐を中心に伊藤ドクターとの親交は続いた。2年間の契約を終えて帰国する際には、心機一転して日本でゼロから再スタートを期する流浪の名医の復活を心から祈らずにはおられなかった。